文化

残された3万5千の写真【下】

日本人向け グラフ誌で紹介

詳細な経緯は不明だが、国策会社「華北交通」の約3万5千点の写真とほぼ同数のネガは長年、京都大人文科学研究所に保管されていた。メディア史に詳しい貴志俊彦京大教授や日本カメラ財団の白山真理調査研究部長ら研究グループが2011年から本格的な調査を始めた。

中国華北地方を中心に鉄道やバスを運行していた同社。制作した日本語の月刊グラフ誌「北支」(1939年6月～43年8月)などは現地編集が強調され、写真を中心に、暮らしや産業を紹介する構成。同誌創刊号には「民衆が、鉄道を中心にして親日に目ざめつつあることは注目すべき動きであろう」などの文章がある。

貴志教授は「内地や在中国の日本人向けの広報・宣伝で、資本や労働力を呼び込むために制作された」と分析する。

先行した南満州鉄道(満鉄)のグラフ誌「満州グラフ」は約1万部発行されたとみられる。ネガは現在も確認されておらず、華北交通の写真群の史料的価値は高いという。

研究グループは2016年11月、写真約800点を収めた「華北交通写真資料集成」(国書刊行会)を出版。英国のグラフ誌にも同社の写真が掲載されていたと指摘する論考も載る。同社の写真は報道機関などにも提供されていたとみられる。

12月中旬にはシンポジウムを東京都内で開いた。中国近現代経済史が専門の島根大の富沢芳亜教授は「華北交通は石炭や鉱産物を運んでいた」と説明。当時、華北地方の鉱物資源の豊富さは注目されていた。富沢教授は「華北の石炭なくして対米開戦はできない。だから石炭の写真が多い」と解説した。

京大などでは18年末にも約3万5千点の写真をネット上で一般公開する計画を進めている。貴志教授は「公開して各国の学者と議論を重ね歴史認識を深めたい」と話す。

㊤写真群は京都大人文科学研究所図書室のキャビネットに保管されていた。上段には写真を貼り付けた整理用カード、下段にネガがあった＝2009年2月(日本カメラ財団の白山真理調査研究部長撮影)㊥「軽機関銃射撃見学　愛路婦女隊員」のタイトルで1939年12月の説明が付いて台紙に貼られ、保管されていた写真。40年の英国グラフ誌「ピクチャー・ポスト」に掲載されていた(京都大人文科学研究所所蔵)㊦日本語グラフ誌「北支」創刊号の表紙(日本カメラ財団所蔵)

「台中国立歌劇院」＝台湾中部の台中市(共同)

国際コンペで躍進

伊東さんら設計者

台湾では、政権交代や施工費の増加などの影響を受け、国際コンペで設計者が決まった後でも、建築が完成しないことが多々あるという。その中で、国際コンペを経て初めてできあがったといわれるのが、伊東豊雄さん設計の2009高雄ワールドゲームズメインスタジアム＝写真ⓒ互助営造＝だ。

台湾南部、高雄市の最寄りの駅からも、鋼管を組み上げたダイナミックな屋根が目に入る。その屋根は上から見るとクエスチョンマークの形を描き、スタジアムに入場しなくても、外壁の切れ目からフィールドが見渡せる開放的な構造だ。

伊東さん以外にも日本人建築家が躍進。団紀彦さんは台北桃園空港第1ターミナルの改修工事などを手掛けた。石上純也さんも2014年に、金門島の金門港フェリーターミナルのコンペで勝っている。

㊤「台中国立歌劇院」の1階ロビーで、開幕式を迎えて喜ぶ市民＝台湾中部の台中市(共同)㊦「台中国立歌劇院」小劇場の屋外に併設した円形劇場で観劇する市民＝台湾中部の台中市(ⓒ台中国立歌劇院)

若者が親近感

台湾の建築家謝宗哲さんによると、日本人建築家が注目を集め始めたのは00年すぎ。安藤忠雄さんの翻訳書などがきっかけだった。

「安藤さんのコンクリート打ちっ放しに見られる、簡素化されたミニマリズムの考え方は、雑然とした都市環境から脱出しようとする台湾の人々にとって、救いとなった」

同じころ国際建築コンペが増え、日本人が勝ち抜くようになった。日本文化を吸収して育った若者たちが親近感を抱く建築だった。台北、高雄という二大都市の間に位置する台中市も、次々にコンペを実施。市長らは、両都市に対抗して観光や経済を発展させる起爆剤として、建築に期待を寄せたという。

歌劇院で05年に伊東さんが、13年には台中城市文化館で妹島和世さんと西沢立衛さんが共同で、曲面から成る巨大な洞窟のような構造は、空間の活用方法の可能性を広げた。開幕式ではパフォーマーが建物の内外を行き来し、開幕公演のオペラは屋外の画面に映し出され、より多くの観客が体験を共有した。

壁によっていろいろなものを隔てていくのが近代主義。その壁をどう壊すか―。伊東さんが、20年以上挑んできた建築のテーマ「内外の相互貫入」は、建物そのものと使い方の相互作用が進み、実現されつつある。

伊東さんはアジアの他の国も、テーマを実現する場になると期待する。「欧州から伝わったモダニズムとは違う新しい建築をつくりたいと、社会が求めている気がします」

日本の建築家が海外で、その社会に応じた価値観を提示するのを見て、私たちが生きるのはどんな社会であり、建築なのかを考えさせられた。

のとして体験する姿を目の

第四十二期 棋王戦

本戦準々決勝 第2局

先

【第五譜】(図は△4三銀まで)

▲6三桂2 △3四銀18
▲5一桂成 △7一金4
▲5四角9 △3八飛10
▲5八金引 △4三銀2

見えにくい寄せ

共に残り時間はすでに1時間半を切っている。局面は千田優勢ながら棋士室で検討する棋士たちも、相手の久保さえも明快な寄せは見つけられずにいた。

だが、ただ一人千田だけは成算を持って踏み込んでいたのである。

わずか2分で▲6三桂と打ったのが見えにくい寄せだった。

意表をつかれた額に手をやり考え普通に△4一飛とのは▲4四飛△同一銀△同金▲同桂飛▲6二角が予想手順で、難しいとあるが寄り筋となこの▲6三桂もくい寄せだが、後と驚かされたこる。自身の実戦譜ソフトで解析、検いる千田が、後日ーネット上で以下にツイートしている。「▲6三桂4四飛△同銀▲7△同玉▲6四銀の

畳づくり三百年 登録商標
京都市左京区岡崎黒谷大本山前